石川県立美術館だより

BIJUTSUKAN DAYORI

第485号　令和6年3月1日発行

特別陳列 加賀藩前田家の名刀
－天下五剣の名宝「大典太光世」が石川に－【前田育徳会尊經閣文庫分館】

国宝《太刀　銘 光世作（名物大典太）》前田育徳会蔵
－「特別陳列　加賀藩前田家の名刀」より－

天神画像と文房具【前田育徳会尊經閣文庫分館】

金沢城の絵師たち【古美術】

特集 小松芳光【近現代工芸】

ヴァリエーションズ
－画家たちの変奏曲－【近現代絵画】

国宝《剣　銘 吉光》と《刀絵図》【古美術】

- 企画展Topics
- 3月の企画展示室
- 令和6年能登半島地震に寄せて
- 学芸室の人々
- 友の会会員募集！

前田育徳会尊経閣文庫分館

天神画像と文房具

2月17日(土)～3月20日(水・祝)　会期中無休

文房具とは、硯や文鎮、筆架など、手紙や文字を記す際に用いる用具の総称です。今日でも身近な用具ですが、江戸時代の大名が用いた文房具は、中国に由来を持つ珍しい石や銅でできた小さな造形品がほとんどで、身近な用具に藩主はこだわり、愛でていたことがわかります。

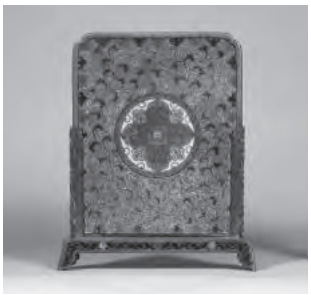
硯屏（けんびょう）は、硯の中に塵や埃が入らないようにするために、硯の脇に立てて用います。《七宝（しっぽう）硯屏》は、七宝の技法で唐花模様をあらわし、その周囲は真鍮で唐草模様が毛彫りで表現されています。箔入りで漆が塗られた《唐物塗箔入硯屏》も紹介します。

筆架（ひっか）とは、筆を置く道具のことで、獅子をモチーフにしたものが複数見受けられます。寝そべる《銅寝獅子筆架》、天を仰ぎ見る《銅獅子筆架》、瑪瑙（めのう）でできた《瑪瑙石獅子筆架》など、材質、形態ともさまざまな姿があります。

紙を押さえる文鎮では、《銅蟹文鎮》が目を引きます。大中小3つの蟹が揃い、まるで親子のような姿を楽しみながら用いたのでしょう。

水滴は、硯へ注ぐ水を入れる容器です。《銅鍍金翡翠形水滴》は、翡翠（かわせみ）の長いくちばしから水を注ぎます。形状が美しく、小堀遠州が所持した3代利常の遺愛品です。同じく水を入れるための《銅兎水入》は、今にも飛び跳ねそうな、まるいうさぎの姿をしています。

本特集では、そのほか筆軸（ふでじく）・墨床（ぼくしょう）・筆点など33点の文房具を、6点の天神画像とともに紹介します。



七宝硯屏

古美術（第2展示室）

金沢城の絵師たち

2月17日(土)～3月20日(水・祝)　会期中無休

本展示では、文化度造営の金沢城二の丸御殿において障壁画を描いた絵師たちのうち、京都から下向した岸駒（がんく）（1749／1756～1838）とその息子岸岱（がんたい）（1782／1785～1865）、そして加賀大聖寺出身の佐々木泉景（1773～1848）の作品を展示します。

岸駒の出生地は越中東岩瀬、加賀金沢など諸説ありますが、幼少時に金沢へ移り、青年期までを過ごしました。その後安永8年（1779）頃、京都に上り、有栖川宮織仁親王に召されて官位を賜り、御所造営など禁裏の御用を数多く務めました。虎の絵で名を馳せ、百花繚乱の京都画壇において存在感を示した絵師です。二の丸御殿の再建事業に際しては、一門を率いて下向し、表向（おもてむき）の障壁画を描きました。

岸駒の長男として京都に生まれた岸岱は、その筆法を受け継ぎ、虎の絵を十八番としましたが、より柔和で洗練された作風を示します。二の丸御殿では、父の帰京後も弟子たちとともに金沢に残り、文化7年（1810）9月頃まで御用を務めました。

佐々木泉景は、大聖寺で染物屋を営んでいた佐々木家の長男として生まれ、寛政2年（1790）に上京して鶴澤探索に入門、享和2年（1802）に法橋位を得て帰郷します。二の丸御殿では、杉戸絵の半数近くを描き、奥向（おくむき）の御用をほぼ独占するなど重用されました。文政4年（1821）には法眼位を得て、ますます盛んとなり、息子の泉玄、泉龍とともに藩の御用に応えました。近世後期の加賀藩を代表する絵師であるといえましょう。

《近江八景図》（部分）岸岱

近現代工芸（第5展示室）

特集　小松芳光

2月17日（土）～3月20日（水・祝）　会期中無休

第5展示室では漆芸家、小松芳光没後30年にあたり、所蔵する小松の作品や資料を特集します。所蔵作品の1点、水がさらさらと流れる清らかな様子を意味する潺々（せんせん）がタイトルに使われた作品《早春潺々盆》は、作者が訪れた富山県城端町の高清水山三納国にある縄ガ池に群生する水芭蕉をモチーフとしています。水芭蕉の蔭からは紅椿が見え、水芭蕉と椿と水の3つが共鳴する早春の美しさに感動したのが、この作品が出来るきっかけとなりました。水面となる背面には青貝が蒔かれ、清らかにきらきらとした水のきらめきを表し、その上には水の流れを表す様子が複数の線で表現され、「潺々」という美しい水の部分をイメージさせます。また大きく配されている水芭蕉は強めの印象よりも、水の流れとは対照的に優しく池の水中になじむように群生する様子が表現されています。作者が目にした水芭蕉の蔭に見えた椿は朱漆を使って描かれたところに金蒔絵で表現され、蔭ながらもとても印象に残る仕上がりとなっています。

当館が所蔵する作品の他、作品が出来るまでに使用された資料等も合わせて紹介します。この他、2022・2023年度、新たに収蔵となった新収蔵作品等も合わせてお楽しみいただきます。

小松芳光《早春潺々盆》

近現代絵画（第6展示室）

ヴァリエーションズ
―画家たちの変奏曲―

2月17日（土）～3月20日（水・祝）　会期中無休

日本画家たちが、一つの主題を繰り返し求め描いた作品群を、変奏曲になぞらえた特集展示です。今号では、具体的な作家・作品からヴァリエーション（変奏曲）を紹介します。

石川義は、一貫して日本の原風景を求めた作家です。なかでも「杉」は石川の主要なテーマの一つで、画業の初期から繰り返し扱ったモティーフです。今回紹介する《石徹白杉（いとしろすぎ）》、《縄文杉》、《御仏供杉（おぼけすぎ）》の3点は、いずれも由緒ある名木を正面（真横）から捉え、墨線を様式的に用いたデフォルメ表現で描いています。

松崎十朗は、街中の何気ない光景にみる様々な光を瞬時に捉える手法で、評価を高めてきました。近年は海辺の風景に取り組み、茫漠とした空間を描いた緻密な写実力・構成力が評価され、《静かな時》が改組新第5回日展会員賞、《海へ》が第8回日展総理大臣賞の受賞へと結実しています。

山本知克は、堂本印象率いる東丘社に所属し、若いころは抽象表現を研究しました。盛期、晩期は異国情緒あふれる街を、俯瞰した構図で描き続けました。山本の探究心は、風景画と並行し、長期に渡る静物画の制作へと向かわせました。今回は一連の静物画から、作家の探究の足どりをご覧いただきます。

その他、稲元実、上田珪草、下村正一ら数々の日本画家が取り組んだヴァリエーションをお楽しみください。

石川義《御仏供杉》

前田育徳会尊經閣文庫分館
特別陳列　加賀藩前田家の名刀
―天下五剣の名宝「大典太光世」が石川に―
3月26日（火）～4月15日（月）・
4月21日（日）～5月26日（日）

当館は昨年11月13日に開館40周年を迎えました。40年前、前田育徳会尊經閣文庫分館（当時は前田育徳会展示室）に国宝《太刀　銘 光世作（名物大典太）》が展示されました。展示の様子を間近で見させていただいた緊張感は、今も忘れません。そしてこの度、40年前とほぼ同じ場所に「名物大典太」を展示します。ただし今回は、長い壁面ケースに1口のみ展示します。

本作は、平安時代後期の永保年間（1081～84）頃に活動したとされる刀工・光世の作です。光世は筑後国三池に住み、「典太」（伝太）と称されたと伝わります。前田家には光世作の刀剣が2口伝わり、長さによって「大典太」、「小典太」と区別したようです。

足利尊氏以来の重宝として、室町幕府将軍家に相伝され、15代将軍・足利義昭が豊臣秀吉に譲り、秀吉から前田利家に下賜されたと伝わります。秀吉から利家に下賜された経緯については諸説あるようです。

『享保名物帳』には、宇喜多秀家に輿入れした利家の四女・豪（樹正院、秀吉の養女）が病気になったとき、利家が大典太を秀吉から借りて豪の枕元に置くとすぐに病気が治り、秀吉に返すと病気が再発し、それを繰り返したため、三度目に秀吉が利家に与えたと記されています。以来前田家第一の重宝とされました。また『金澤古蹟志』には、「城内薪ノ丸宝蔵に納め置かるるに、宝蔵の上は鳥類も居止らざるとの由にて、俗に鳥とまらずの土蔵としも呼べり」という記載があるように、金沢城においても特別な霊力を発していたようです。

このような歴史的背景から、本作の公開は限定され、今回は9年ぶりとなります。

国宝《太刀　銘 光世作（名物大典太）》（部分）

古美術（第2展示室）
国宝《剣　銘 吉光》と《刀絵図》
3月26日（火）～4月15日（月）・
4月21日（日）～5月26日（日）

毎年、国宝《剣　銘 吉光》（白山比咩神社蔵）を展示する度に、この名剣が特別の存在だったとの認識を新たにします。本作は、1633年に3代将軍・徳川家光の養女大姫（清泰院、水戸徳川頼房の子）が加賀藩4代藩主・前田光高に輿入れした際の持参品で、清泰院が死去した翌年の1657年に、嫡男の5代藩主・綱紀が、母の冥福を祈って白山比咩神社に奉納しました。

現在のところ、本作がどのような経緯で徳川家の所蔵となったかについては不明です。しかし、将軍家の養女に、輿入れの際に持参させるとなれば、名物刀剣にしばしばまつわる俗的な逸話などとは無縁のものだったのでしょう。そして本作が放つ清冽な気品は、前田家と徳川家の緊張関係も和らげたのではないか、との感慨も抱かせます。

前田育徳会尊經閣文庫分館の展示と同様に、本作も第2展示室正面の壁面ケース中央に1口のみ展示します。そして常設展示されている古九谷の反対側のケースには、重要美術品《刀絵図》の全体を展示します。刀絵図とは、刀剣鑑識の参考とするため、必要な点を簡潔に図示したものです。本阿弥宗家の9代にあたる本阿弥光徳が1595年に制作した本作には、主として豊臣秀吉の蔵刀40口が収録されています。特に「太閤御物」として名声の高いものなどが、その後の大坂の陣や明暦の大火で焼けたり、消失したりする前の姿で確認できる点でも第一級の史料ということができます。また粟田口吉光が巻頭から12口収録されていることは、この刀工の高い歴史的評価を伝えるものとして注目されます。

国宝《剣　銘 吉光》白山比咩神社蔵

第7展示室

第47回
伝統九谷焼工芸展

3月8日（金）～17日（日）　会期中無休

昭和51年に認定された石川県指定無形文化財保持団体九谷焼技術保存会が、技術保存・発展向上を図るための事業として毎年行っている公募展で、入選作並びに九谷焼技術保存会会員の作品を一堂のもとに展示します。

◇観覧料　一　般：350円（280円）
　大学生：280円（220円）
　高校生以下無料

※（　）内は20名以上の団体料金。当館友の会会員は、会員証の提示により団体料金になります。

◇連絡先　能美市泉台町南13番地
　石川県九谷会館内　九谷焼技術保存会事務局
　電話：0761－57－0125

第8・9展示室

’23　玄土社書展

3月16日（土）～18日（月）　会期中無休

玄土社の2023年中の歩みをまとめた創作（抽象）40点、古典臨摹（写し）15点をお目にかけます。

一昨年、私たちの偉大な指導者であった主宰表立雲が他界いたしましたが、その理念は現在もかわらず私たちは揺れることなく活動を続けています。

今回は、特別展示として、1945年に富山県砺波野で深い交流が始まった大澤雅林、棟方志功、表立雲の三者三様の大作をご覧いただきたいと思います。

◇入場無料

◇連絡先　玄土社本部（表）
　住　所　金沢市本多町1－7－15
　電　話　076－263－3730

企画展Topics

脇田和と佐藤忠良
―子どもへのまなざし―

4月24日（水）～5月26日（日）　会期中無休

石川県立美術館は平成27年度に、一般財団法人脇田美術館より317点の脇田和（1908～2005）の作品の寄贈を受け、現在321点の作品を収蔵しています。脇田家は、2代藩主前田利長の代から明治維新まで加賀藩に仕えた、この地にゆかりある武士の家柄です。

脇田和は明治41年東京に生まれ、15歳でドイツに留学してベルリン国立美術学校に学び、美術全般にわたって研鑽を積みました。帰国後は戦前の洋画壇において頭角を現し、昭和11年、猪熊弦一郎、小磯良平らと共に、帝国美術院を脱退した新進気鋭の作家集団として新制作派協会を創立し、以後、常に具象絵画の第一線にあって画壇をリードしました。

本展は当館の脇田作品を核とし、脇田と交流の深い作家の作品を交えて、戦後美術界の様相を示すことを趣旨としています。今回は交友作家を取り上げる企画展の第2弾として、同じ新制作派協会で活躍した佐藤忠良を取り上げて開催します。脇田と佐藤は、画家と彫刻家という相違はあるものの、権威に対抗する姿勢を貫いたメンバーであり、戦後の日本の新しい美術の潮流を作り上げた仲間です。また、脇田和の『おだんごぱん』、佐藤忠良の『おおきなかぶ』と誰もが心に残る絵本そして子どもなど、共通したテーマの作品を手がけた二人でもあります。今回の展示では、絵本原画を含む、二人の子どもへのまなざしが感じられる作品や代表作、約90点を展示します。また、終生自らの芸術の高みを追求した仲間としての二人の関わりについても紹介します。

脇田和《母子像》1946年
石川県立美術館蔵

—令和６年能登半島地震に寄せて—

「名宝」と「人財」

石川県立美術館　副館長　山本　陽一

この原稿は1月31日に書いていますが、「あの日」から早や一月が経ちました。幸いにして当館に大きな被害はなく、2日後には能登へ帰省していた職員の無事も確認されましたが、石川県としては記録が残る中で過去最大の災害、奥能登などの惨状を見るにつけ、今も胸が痛みます。

被害は人だけではなく、住居、電気・水道・通信・道路といった社会インフラ、そして分厚い能登の歴史が織りなす文化資源にも甚大な被害を及ぼしました。

人の安否確認におおよその目途がついたまさにこれから、仏像や古典籍といった文化財や輪島塗に代表される伝統工芸の名宝の現況調査、一時避難、修復等々の長い道のりが始まります。先般、県から文化庁に文化財レスキューの支援要請を行いましたが、これを受け、国立文化財機構やその下に集う全国美術館会議をはじめとする27団体が全国規模で支援するというスキームが出来ています。我が県立美術館も県立歴史博物館ともども支援スキームの中核館として最大限尽力してまいります。

その際、考えておかなければならないことがあります。それは輪島塗などの伝統工芸の場合は、過去から受け継がれてきた「名宝」を蘇らせることも大変重要ですが、それを製作する「人財」、その塊である産地の再興もこれに劣らず大切だということです。「名宝」のレスキューとともに、最高水準の美や技を将来に向かってさらに発展させていく「人財」のサポート、このことにも関係部署と連携してできる限りの支援をしてまいります。

学芸室の人々

日置　樹也（学芸第一課学芸員）

学生時代見に行った、京都国立博物館の特別展覧会「狩野山楽・山雪」。そこで最も惹かれたのは、狩野山雪《長恨歌図巻》（チェスタービーティーライブラリ）でした。色彩豊かかつ精緻に描かれた長恨歌の世界に魅了され、買った図録もボロボロにするほど何度も読み返し、夢中になったことを覚えています。

色々と作品を見ることが好きな私でしたが、この作品に出会っていなければ、近世絵画を研究してみよう、と考えなかったかもしれません。あの時見に行ってよかったと思うと同時に、いつかもう一度所蔵先のアイルランドで目にしたい、と思っています。

お詫びと訂正

2月号の8ページに掲載しました「次回の展覧会」の欄に誤りがありました。お詫びのうえ、左記の通り訂正いたします。申し訳ありませんでした。

次回の展覧会　令和6年3月26日（火）～4月15日（月）会期中無休

前田育徳会尊經閣文庫分館

特別陳列　加賀藩前田家の名刀　—天下五剣の名宝「大典太光世」が石川に—

第2展示室　国宝《剣　銘 吉光》と《刀絵図》

第3～9展示室　第80回現代美術展—洋画・彫刻・工芸・写真—

3月29日（金）～4月15日（月）

令和6年度

石川県立美術館友の会　会員募集！

3月1日（金）から受付開始！
自動更新ではありませんので、継続を希望される方は改めてお申し込み下さい。

1. 年 会 費　2,000円

2. 受付期間　3月1日（金）より開始

3. 申込方法

A　来館での申込

＊即日のご入会が可能です

・受付場所：総合案内にお声かけください

・受付時間：午前9時30分～午後5時（休館日を除く）

※展示替えによる3月の休館日は、21日（木）～25日（月）です

・申込方法：会費と入会申込書に記入事項を記入して提出。

※現金のみの取扱いとなります

B　郵便振替での申込

＊会員証は3月末発行の美術館だよりと共に郵送します

・申込方法：同封の払込取扱票に記入事項をご記入の上、郵便局（ゆうちょ銀行）で年会費をお振込みください

※払込手数料は申込者負担

※郵便局で払込した方は、同封の申込書を郵送する必要はありません

※払込取扱票の受領証は、会員証が送付されるまで大切に保管してください

◇払込取扱票への記入事項

・口　座　番　号：00700－7－46490

・加　入　者　名：石川県立美術館友の会

・通信欄記入事項：①会員の区別（継続・新規・元）および現在の会員番号、②年齢、③性別、④職業、⑤住所、⑥氏名、⑦電話番号

4. その他

・会員証の有効期限は、令和6年4月1日～令和7年3月31日です

・会員証は記名者本人のみ有効（ご家族の方との連名受付はありません）

・一度納入された会費の返金はできません

・会員証紛失による再発行はできません

5. 会員の特典

●コレクション展無料（要会員証、会員本人のみ）

●主催企画展チケット2枚プレゼント
3回目以降は会員証の提示により団体割引料金

●同伴者の観覧料割引
会員証の提示により、主催企画展・コレクション展観覧料が団体割引料金（同伴者2名まで）

●提携館の主催展覧会割引（会員本人のみ）
石川県立歴史博物館、石川県七尾美術館、石川県輪島漆芸美術館、石川県九谷焼美術館、石川県能登島ガラス美術館、金沢21世紀美術館、脇田美術館の各館主催展覧会を割引

●最新情報をお伝えする『石川県立美術館だより（本誌）』を毎月郵送でお届け

●会員限定イベントへのご招待

●館内カフェ「ル ミュゼ ドゥ アッシュ KANAZAWA」にてドリンクの割引（要会員証、会員本人のみ、平日限定）

脇田和と佐藤忠良 ―子どもへのまなざし―

企画展Topics

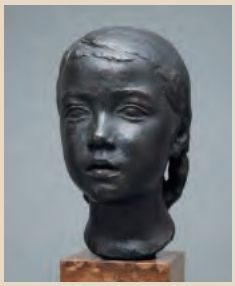
会期：令和6年4月24日（水）～5月26日（日）

脇田和《あい坊と猫》1948年
石川県立美術館蔵

脇田和《浴室》1949年
石川県立美術館蔵

佐藤忠良《ボタン（大）》1967-69年
宮城県美術館蔵

脇田和《ポンコツ車を誘導する鳥》1981年
石川県立美術館蔵



佐藤忠良《オリエ》1949年
宮城県美術館蔵

佐藤忠良《群馬の人》1952年
宮城県美術館蔵

次回の展覧会

令和6年4月21日（日）
～5月26日（日）
会期中無休

前田育徳会 尊經閣文庫分館	第２展示室
特別陳列 加賀藩前田家の名刀 ―天下五剣の名宝「大典太光世」が石川に―	国宝《剣　銘 吉光》と 《刀絵図》

第５展示室	第３・４・６展示室	企画展示室
幾何学文様のデザイン	優品選 【近現代絵画・彫刻】	脇田和と佐藤忠良 ―子どもへのまなざし― 4月24日（水）～5月26日（日）

ご利用案内

コレクション展観覧料
一　般　370円（290円）
大学生　290円（230円）
高校生以下　無料
※（　　）内は団体料金
3月4日は第1月曜により
コレクション展示室無料の日

開館時間
午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間
午前10:00～午後6:00

3月の休館日は
21日（木）～25日（月）

広告
「石川県立美術館だより」に広告を掲載してPRしませんか？
サービス・集客
広報紙広告ならではのメリット
地域に根ざした情報発信
石川県での知名度向上
自治体発行の信頼度の高い広報媒体
他エリア自治体広告もお任せください！
お問い合わせは 092-716-1401（代表）
株式会社ジチタイアド
福岡県福岡市中央区薬院1-14-5MG 薬院ビル7F
財源確保 検索
※株式会社ホープの広告事業は、2021/12/1付で「株式会社ジチタイアド」に分社化しております。

石川県立美術館だより
第485号（毎月発行）
2024年3月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL https://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/

石川県立美術館は電源立地地域対策交付金を活用して運営しています。